

錆試論

gnck

凝り固まった、物の感性的な「役割」に疑問符をつけ、関係の系を解きほぐし、再び編み直すのが芸術の役割とすれば、三輪彩子にとって、錆たちは何の謂いだろうか。

金属が錆びる、塗装が剥げる、風雨にさらされた木が朽ちていく、葉が枯れる、焼けた木が焦げ落ちる。物事が、時間とともに錆びついていく。いつかは朽ち果てるものとして。

飾り立てられ、発光する色彩が、結局は人間に、社会に向けられているのに対し、錆は全く人間の都合の良さのためにはない。

復元された色彩の鮮やかさよりも、数百年を経て朽ちつつあるさなかの仏像に畏怖を感じる感性は、工業的な色彩が日常を埋め尽くした我々にとっては自然なものでもある。それらの素材がもともと持っている物性としての崇高さを、抽象化されたオブジェクトとして提出することは、現在において彫刻家の類型の一つとしてあるだろう。しかしそれは注意しなければ、朽ちていくマテリアルへの単なるフェティシズムともなりかねない。

しかし三輪作品は、ただ抽象化されたオブジェクトとして、錆びた物を放り出しているだけではなく、実際に存在する野菜の無人販売所といった「スケール」を引用してみせる。侵入を禁ずる黄色と黒の表示や、「無人」販売所は、人間にだけ意味を持つメッセージである。しかもそこには、そのメッセージを発する主体は既に不在となっている。それらのメッセージは、社会的な約束事が遵守されるであろうという「信頼」に基づいているものだ。しかし繰り返すが、錆に、人間の社会的な都合は全く関係がない。錆のもつ崇高さは、人間のコミュニケーションの総体でしかない「社会」が終わったとしても残り続ける「世界」を示すゆえのものだ。であるとすれば、人目をひく色や記号の虚飾が終わったあとの世界で、しかし人が人をささやかに信頼していた痕跡がどのように見えるのかをということを、三輪の作品は示してくれているのかもしれない。

2018年4月6日発行

三輪彩子個展「窓ごしに手を見る」に寄せて